大野町が生んだ戦国天才軍師

竹中半兵衛物語

竹中半兵衛顕彰会

はじめに

皆さんは竹中半兵衛という人を知っていますか。今までに聞いたことはありますか。竹中半兵衛は約５００年前、戦国時代とよばれていた時代に、たいへん大きな活躍をした人です。この人がどのような人生を送り、どのような活躍をしたのでしょうか。それを知って今後のふるさとの歴史について興味を持っていただくことを願っています。

○ 竹中半兵衛はわたしたちの町の生まれです

竹中半兵衛は１５４４年、現在の大野町公郷区大御堂という所で生まれました。お父さんは、美濃（岐阜県の南半分ぐらい）地域を治めていた斎藤道三というお殿さまに仕えていた竹中重元というお侍でした。半兵衛が生まれ育った時代は、日本の歴史上戦国時代と言われているひじょうに社会が乱れていた時代で、戦いに明け暮れた時代でありました。家来が主人を襲って自分が上に立つ事が平気で行われていた世の中でした。

半兵衛は小さい頃より勉強が好きで、多くの本を読んだといわれています。父・重元は半兵衛が１５歳になった１５５８年に、敵の岩手弾正（現在の不破郡垂井町岩手に住んでいた）を攻めてほろぼし、岩手に城（菩提山城）を作り、斎藤道三に代わって、美濃のお殿さまになっていた孫の斎藤龍興に仕えました。１５６２年、父・重元が死亡したため、半兵衛は１９歳で竹中家を継ぎました。

○ 竹中半兵衛は武将としてどんな生き方をしたのでしょうか

戦国時代は日本を自分の力で治めようと思っている人が多くいました。このような願いを持っていた人は、この地方でも美濃（岐阜県）の斎藤道三、お隣の尾張（愛知県）の織田信長や、三河（愛知県）の徳川家康がいました。その他に、駿河（静岡県）の今川義元、相模（神奈川県）の北条氏康、甲斐（山梨県）の武田信玄、越後（新潟県）の上杉謙信などがいました。そんな中、織田信長とその家来の木下藤吉郎（のちの秀吉）からの強い誘いで、竹中半兵衛は信長の家来となり、とくに秀吉の軍師として３６歳で病気で死ぬまで仕えました。

軍師とは戦いで勝利を収めるための作戦を立てる人のことです。もちろん、時には兵士たちと一緒に戦いに出ることもありました。

○ 竹中半兵衛の体つきや人柄はどんな人だったのでしょうか

生まれつきやせていて、弱々しく、色白で、小さい頃は女の子と間違えられたといわれます。人に、美しいと言われ、恥ずかしいと思ったこともあったようです。武士としての体力は決してすぐれてはいなかったようでした。頭を使うより仕方がないだろうと本を読みあさって知識を身につける努力をしました。とくに中国の戦いの仕方について書かれた本をたくさん読み、良く考え、自分の頭で練り直して組み立て、自分のものにしていくのはどんなことより楽しく、勉強したことを実際に使うチャンスがあれば良いなと思っていたといわれています。

○ 竹中半兵衛が 13 歳の時、一大事件が起こりました

竹中重元の菩提寺・月眞寺
[大野町公郷(大御堂)]

竹中重元の墓(月眞寺)

１５５６年、まだ公郷大御堂城に住んでいた時、父・重元が仕えていた斎藤道三が息子の義竜との戦いで負けた時、半兵衛の家が義竜の兵隊におそわれたことがありました。この時、父は戦いに出ており、屋敷にいませんでしたが、半兵衛は２歳年下の弟・久作と共に塀のすきまから鉄砲を撃ち、数人の敵を倒しました。母親も長刀を持って、二人を励まし、家族が力を合わせて見事敵を追いはらいました。

○ 竹中半兵衛は秀吉に仕える前、日本中に知れ渡るような大きな出来事を起こしました

それは、１５６４年、半兵衛が２１歳の時の出来事でした。弟・久作と家来わずか１６人と共に、大きな合戦もしないで、実に見事な作戦を実行して、当時お殿さまであった斎藤竜興（斎藤道三の孫）のいた稲葉山城（現在金華山の頂上にそびえ立っている岐阜城）を占領したの

稲葉山城(現在の岐阜城、岐阜市)

です（弟の病気見舞いと言って油断させ城に入り攻撃した）。この事件に大変驚き、感心したのはとなりの国の織田信長でした。

さっそく、「乗っ取った城を信長に譲り、信長の味方になるならば、美濃の国の半分をお前に任せよう」との誘いがありました。

しかし、半兵衛は「自分が城主になりたいのではなく、愚かな城主・竜興をこらしめるために城を乗っ取っただけであり、自分の国の殿さまを裏切る気はまったくない。いずれ殿さまに城は返すつもりだ」と返事をして信長の誘いを断りました。

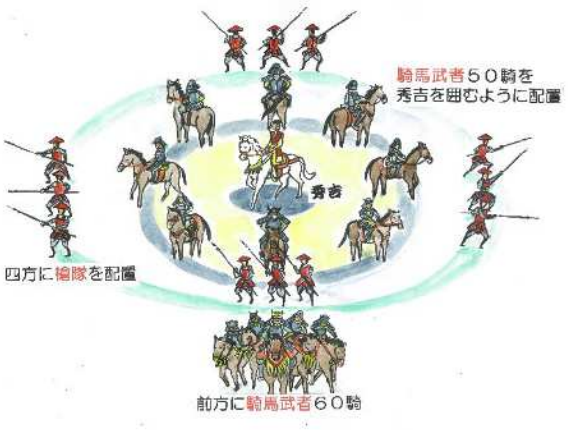
半年後、半兵衛は、竜興が心を入れかえたのを見届けてから城を返しました。損得をはなれ、自分の考えを大切にする人でした。半兵衛はこの事件の後、自分の城・菩提山城を弟の久作に譲り、だれの家来にもならず、ひっそりとしたくらしを始めました。

この作戦の成功によって日本中に名を知られた竹中半兵衛には、織田信長、浅井長政などまわりの武将から自分に仕えてほしいと誘いがありましたがなかなか応じませんでした。しかし、信長の家来の秀吉は半兵衛がひっそりと暮らしていた所に何度も何度も訪ねてきて信長に仕えてくれないかと誘いをかけました。その熱意と秀吉の人柄に感心し、半兵衛はこの人となら平和な住みやすい日本を作れるのではないかと思い、信長の家来になり、秀吉の軍師として仕えることになりました。

○ 姉川合戦での半兵衛の優れた作戦

１５７０年、越前（福井県）の朝倉義景と北近江（滋賀県東北部）の浅井長政との連合軍と織田信長・徳川家康軍が琵琶湖にそそぐ姉川をはさんで向かい合いました。

この戦いを姉川合戦といいます。浅井軍は川を渡って猛烈な勢いで攻撃を仕掛け、信長本隊に迫ってきました。敵が攻めてくるかもしれないと思っていた半兵衛は秀吉軍の敵への向かい方を変えて戦いました。その戦法とは、敵軍に対して横に長くした隊形は、縦の備えが十分でないために大将がいる所まで一気に攻められる危険があるが、兵を丸い形にし、その前に少し、馬に乗った侍を並べ、そのうえできるだけ縦の列に槍隊を並べ本陣への突進を止め、大将への攻撃も防ぐことができ、敵の出方によって円陣を大きくしたり小さくしたりと自由に動く事ができる隊形です。



姉川合戦で半兵衛が考案した陣形（雑誌「歴史人」より転載） 秀吉から策を問われて、陣替えを進言した。敵陣の突進を拒むため、円陣を組んだ。

戦いの形は水のようであるべきで、水には形がなく、さまざまに変化しながら、高い所を避けて低い所へ流れて行く。戦いも同じように、敵の変化に応じて形を変えてゆくべきであるというわけです。

戦いにのぞんでは、敵を知り、味方の力を知ったうえで、その場に合わせて行動しなくてはならない事をいつも言いつづけ、それを実行して敵の攻撃を防ぎました。

○ 浅井長政の小谷城をせめた時、竹中半兵衛の知恵で、信長の妹である浅井長政の妻・お市の方とその子供たちを無事助け出しました

織田信長の妹・お市の方を妻に迎えて信長に仕えていた浅井長政が信長の敵になりました。信長は怒り、浅井を攻め滅ぼすことを決めましたが、一気に城を攻めれば自分の妹とその子供たちも犠牲になってしまいます。秀吉の命令で信長の妹親子を助け出す作戦を考えた竹中半兵衛は、この長政の裏切りは、頑固な父親・浅井久政の強い

小谷城の配置図（雑誌「歴史街道」より転載）

反対があることと、長政が家族思いであることを考えあわせ、父親との連絡を断つ戦法とり、まず父親・久政と長政のいる本丸の中間である京極丸を攻め、その後父親・久政のいる小丸を攻めおとし、親子の連絡を完全になくしてから、本丸の長政に市親子の開放をせまり、長政もこれを受け入れ見事救出に成功したのです。

○ 別所長治の居城三木城攻略には「兵糧攻め」という戦法を提案して、見事成功しました

竹中半兵衛は戦いにおいて、むだに血を流す事を好む人ではありませんでした。相手の気持ちを考えて降参をよびかけ、たとえ話し合いが実らず戦いとなっても、正面衝突を避けてさまざまな駆け引きをおこない、できるだけ人が

死んだりケガをしたりしないような戦法を心がけていました。かたく守っている城をむりやり攻めれば、たとえ勝ったとしても、味方に大きな損害が出ます。それよりも時間をかけてじっくり戦い、敵が音を上げるのを待つ方が利口であり、戦わずして勝つのが一番よい作戦というわけです。半兵衛は、三木城を攻めるにあたって、焦らず、三木城の周囲をしっかりと固めている支えの城（野口、橋谷、神吉、志方、高砂城）をひとつひとつ攻めおとしていき、外との連絡をとれなくしたうえで、三木城を蟻の這い出る隙間もないほど取り囲んで、食糧を運びこめないようにして兵士を弱らせ、相手を降参させる戦法として「兵糧攻め」にすることを提案し、秀吉はこの作戦を採用しました。この戦法は、長い時間がかかったものの、二年後に見事に三木城は攻め落とされました。しかし、竹中半兵衛はこの三木城合戦中の１５７９年６月１３日に持病の肺の病が重くなり、作戦の成功を見ることなく、亡くなりました。３６歳。天才軍師のあまりにも早すぎる死でありました。

竹中半兵衛の墓（兵庫県三木市平井）

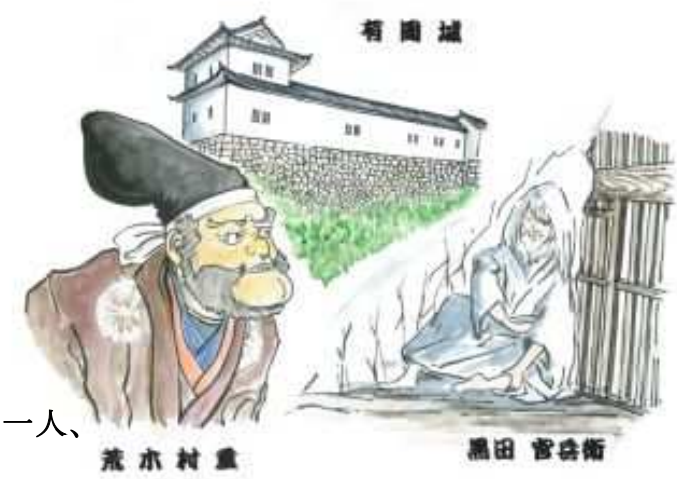
竹中半兵衛は秀吉にこの大作戦を提案した時、同時に作戦の成功後についても大切な願いごとを述べていました。それは、「三木城をせめ落としたら、敵の兵士に対して、思いやりの心をもって臨んでほしい。人の信用を失わないようにし、人々の心を味方につけるよう心がけてほしい。また、長い戦いにより、三木城の近くの人々はつかれきってしまう。戦の後は税金をなくすなどして、他の国へ逃げていった人々を呼び戻して復興を図ってほしい。さらに、誰もが自由に商売ができるようにしてあげてください。」という内容でした。竹中半兵衛が人々の生活を思い、安定した社会の発展を大切にし

たいとする心が非常によく表れている言葉であります。

○ 竹中半兵衛が命をかけて助けた人質の松寿丸（のちの黒田長政）

竹中半兵衛とともに秀吉に仕えた黒田官兵衛という軍師がいました。官兵衛は秀吉に仕える前には、兵庫県の姫路城の殿さまであり、本家の御着城（城主は小寺政職）の家老もしていました。織田信長の日本全国を支配しようとする勢いを受け、自分たちが生き残るためには、当時、この地域に力を持っていた広島県の毛利一族のなかまになるよりも信長の味方になる方がいいと考えました。そして信長に会い、その家来になる事と、信長が中国地方を攻める力になりたいと言い、仕えることになりました。そして秀吉の軍師として中国攻めの案内役を務めるように言いつけられました。黒田官兵衛の努力のおかげで、多くの力のある殿さまが信長の味方に付きました。戦国時代には、味方になったしょうことして人質を差し出す（親、妻や子を主君に預けること）のがふつうでした。信長の命令で、竹中半兵衛は黒田官兵衛の主人である御着城主の小寺政職の人質を差し出すよう求めたところ、官兵衛は主人に代わって自分の一人息子の松寿丸（当時 10 歳、のちの黒田長政）を差し出しました。これには半兵衛は、自分にも 6 歳の男の子・重門がいましたので、「あなたの気持ちは痛いほどわかる」と言い、大感激しました。そして、松寿丸は秀吉の城に預けられました。

１５７８年２月、織田信長の家来になっていた三木城の別所長治が、信長にさからったため、秀吉軍はこの城を攻めることになりました。間もなくこの戦いに加わっていた織田方の有力武将の一人、



荒木村重も、勝手に自分の城に戻ってしまい、信長に反抗しました。村重と親しかった黒田官兵衛は村重を説得しましたが、聞き入れられず、逆に城内の牢に閉じ込められてしまいました。

信長は、いっこうに帰らない官兵衛を、村重に味方した「裏切り」と決めつけて、人質の松寿丸を殺すよう秀吉に命じました。しかし竹中半兵衛は今までの官兵衛との付き合いから裏切りは絶対無いという強い信念を持ち、信長の命令をきかず、黒田官兵衛を信じとおし、松寿丸をひそかに自分の故郷の家にかくし、命を助けました。

松寿丸をかくまった五明稲荷（不破郡垂井町）

その後、実際に黒田官兵衛は裏切りではなく、牢に入れられていたことがわかり、半兵衛の言った通りになりました。官兵衛は救い出され、松寿丸が生きている事を知らされ大よろこびしました。同時に息子の命の恩人竹中半兵衛が半年前に既になくなっている事を知らされ、肩を震わせて大泣きしました。信頼を深めていた人をあくまで信じ続けた半兵衛と官兵衛の感動的な、そして人間として持ち続けたい人を信ずることの大切さを教えてくれる歴史に残る大きな出来事でありました。官兵衛は一生、半兵衛のためにおいのりをすることを忘れなかったと伝えられています。

松寿丸は、成長して黒田長政となり、江戸時代には博多のまちのもとを作ったりっぱな殿さまとなりました。そして、竹中半兵衛のお陰で世にある事を深く感謝し、その後、代々半兵衛の子どもたちを大切にし続けました。

三木市平井地区の半兵衛墓所

◎竹中半兵衛の教えを物語るエピソード

竹中家の家紋

☆ 軍談(ぐんだん)の席で厳(きび)しく注意した事　半兵衛が息子の重門(しげかど)に戦いについて教えていると、重門が急に席を立ってしまいました。理由を聞くと、「おしっこに行きたくなった」と答えました。これに半兵衛は怒(いか)り、「たとえ小便(しょうべん)をもらそうとも、戦いの話をしている席(せき)を立ってはならない。竹中の子が戦いの話に夢中(むちゅう)になって、トイレにも行かなかったと言われれば、それは竹中家の子としてははずかしくないこと」と言って、重門を注意したと言われています。

☆ 豊臣秀吉が黒田官兵衛に渡した約束状(やくそくじょう)を破り、燃やしてしまった事　黒田官兵衛は豊臣秀吉より一枚の手紙を与えられていました。「そなたを兄弟(きょうだい)と同じように思う。手柄次第(てがらしだい)でさらに領地(りょうち)を与えよう」という内容でありました。半兵衛は、秀吉に認められた事を喜び、家宝(かほう)のように大事にしている官兵衛からその手紙を見せてもらいすぐに火に入れ燃やしてしまいました。怒(いか)る官兵衛に向かって「このようなものにとらわれていると、いずれ自分のあつかいに不平不満(ふへいふまん)が生じ、正しいことが分からなくなってしまいます。それでは戦いのための正しい知恵(ちえ)は出せません。そもそも知恵は自分のためではなく、天下のために用いるべきではないですか」と説得(せっとく)しました。

半兵衛の花押（署名）

おわりに

竹中半兵衛は、いつも落ち着いていて、春風のように爽やかな 男のイメージで語られてきました。やせていて、女のようだったと言われています。

天下を取ることが、生きることの目的ではなかったのです。　戦いは好きだったと思われますが、勝って領地を広げることが楽しいのではなく、自分が人よりすぐれた知恵を使って勝つということが好きだったと思われます。しかも、人を殺したり傷つけたりすることは好まず、できるだけ戦わずに降参させるよう知恵を働かせ、そういう話し合いに持ち込むことを大切だと感じていたし、そこに、自分を輝かせることのできる場があると考えていたのではないかと思われます。やむを得ず武器を用いた戦いになることは度々ありましたが、半兵衛は心より人々の幸せ、平和で安定した世の中の実現を望む軍師だったのです。

現在では竹中半兵衛は、
インターネットの書き込み
などの中では「無私・無欲の武将」
といわれています。

是非訪ねてみたい竹中半兵衛ゆかりの史跡

1. 半兵衛生誕地

所在地：岐阜県揖斐郡大野町公郷。

大御堂城跡地には竹中半兵衛公生誕の顕彰碑があります。大野町指定史跡となっています。

2. 月眞寺

所在地：岐阜県揖斐郡大野町公郷

竹中半兵衛公生誕の顕彰碑のすぐ東にあります。竹中家が垂井町岩手に移る以前には竹中家の菩提寺でした。月眞寺の墓地には半兵衛の父、竹中重元の墓があり、大野町史跡に指定されています。

3. 稲葉山城（岐阜城）

所在地：岐阜市金華山丸山

金華山の頂上にある岐阜城まではふもとからロープウェイで容易に行くことができます。現在山麓は岐阜公園となっています。

4. 菩提山城

竹中氏の陣屋跡

所在地：岐阜県不破郡垂井町岩手

半兵衛の父、竹中重元が岩手弾正を攻め滅ぼし、大野町公郷から移った後に築いた城で、竹中家の拠点となりました。現在は城跡のみとなっていますが、山麓には竹中氏の陣屋跡が残っています。

5. 禅憧寺

所在地：岐阜県不破郡垂井町岩手

岩手城から北へおよそ 500mの菩提山山麓にあります。竹中家の菩提寺です。墓地には半兵衛の墓があります。

6. 五明稲荷

所在地：岐阜県不破郡垂井町五明稲荷社

竹中家臣の不破矢足の屋敷跡で、人質の松寿丸が長浜から移されて、この屋敷に預けられました。人質を解かれ、播州姫路に帰るにあたり、記念に手植えをした銀杏が現在大樹となり、五明稲荷に聳え立っています。

7. 平井山本陣跡

所在地:兵庫県三木市平井

三木城攻めの羽柴秀吉の本陣があったところです。兵糧攻めという長期戦で、三木盆地を囲む周りの山々に武将の陣を置き、自分はそれらが見渡せる平井に本陣を設けたのです。標高 50mにも足らぬ小山で、東西に低い山脈が続いています。

8. 竹中半兵衛の墓

所在地:兵庫県三木市平井

平井山周辺は観光ぶどう園がありますが、このぶどう園の中に白壁の土塀に囲まれた竹中半兵衛の墓があります。平井の人たちは現在も毎年 7 月 13 日に法要を営んでいます。姫路市、垂井町、大野町などからも参拝者があります。

竹中半兵衛　略年譜

西暦	年号	年齢	主　な　出　来　事
1544	天文13	1	揖斐郡大野町公郷大御堂に竹中重元の子として誕生
1556	弘治　2	13	斎藤義龍側の者たちに襲撃されたが、弟久作と共に戦い、撃退する
1558	永禄　1	15	父重元が不破郡岩手の岩手弾正を攻略したため、移住する
1562	永禄　5	19	父重元の死去にともない、家督を継ぎ、菩提山城主となる
1564	永禄　7	21	弟久作とともに、16名の家来で斎藤龍興の稲葉山城を乗っ取る
1567	永禄　10	24	織田信長、稲葉山城を攻略し、美濃を平定する
1570	元亀　1	27	羽柴秀吉に説得され、軍師として仕えることになる。姉川合戦において、作戦戦術について陣替を献策し、浅井勢に対し優位に戦う
1573	天正　1	30	浅井長政の小谷城攻めにおいて、お市の方母子の救出作戦を秀吉に献策し、成功させる。秀吉はこの功績により、小谷城の城主になり、北近江三郡、石高あわせて 12 万石が与えられた
1574	天正　2	31	秀吉の長浜城下町の建設に対し、町作りや施政について多くの有益な献策をする
1575	天正　3	32	秀吉の長浜城入城にともない、1053石をうける。　三河の長篠合戦に秀吉に従い出陣し、武田勝頼軍の裏を読み切り、見事な防衛に成功する
1576	天正　4	33	織田信長の安土城建設工事に当る
1578	天正　6	35	叛旗をひるがえした播磨三木城の別所長治を兵糧攻めにする。まもなくその陣中にあった有岡城の荒木村重も謀叛を起こし、荒木を説得に行った黒田官兵衛が捕えられる。官兵衛を疑った信長は、人質の松寿丸を殺すよう命じたが、ひそかに岩手に松寿丸をかくまう
1579	天正　7	36	6月13日、竹中半兵衛、三木陣中に病死す。三木城外平井山中に葬る

大野町公郷　竹中半兵衛生誕の地顕彰碑

大野町公郷　竹中半兵衛生誕の地顕彰碑